
赤い糸

優宮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤い糸

【Zコード】

N7332X

【作者名】

優富

【あらすじ】

クリスマスイブ。獅子岡という少年に遊びが目的でつき合わされそうになつた1人の少女と同じ日にその少女に告白しようとした1人の少年は、クリスマスイブの夜に偶然会う。互いにすれ違う心はいつまでも落ち着かずについたそんなある日、獅子岡自身が少女に言い寄つてきた。

更新はとってもとってもゆっくりです

あの雪の日、君に会った。黒の長いマフラーで顔を隠して泣いていた君の顔をよく覚えている。クリスマスイブだというのに失恋でもしたのか。うつすらと涙の後が残っていた。

「…平山風邪ひくぞ？」

「…！鈴木くん。」

鈴木 啓太一応13歳。中1です。那美中学校でサッカー部、これといった特技はありません。

平山と言われた少女は恥ずかしそうに俺を見る。

「…失恋したんだ♪私。」

とにかく長い間泣いていたみたいだったから近くのカフェで温まることにした。しばらく俯いていた平山も時間が少したつた今、今日あつた話をしてくれた。

同じクラスの獅子岡 龍真に告白したらしい。するとキスしてきたらしい。びっくりして獅子岡の顔をみると「付き合おう」って言つてきたらしい。

「よかつたじゃん。失恋じゃないし」

「その次だよ。」

で一緒に帰ろうつていつたんだけど今日は友達を遊ぶ約束しててすぐに行かなくちゃならないと言われて仕方がなく一人で帰ろうとしたときに忘れ物しているのに気がついて取りに行つたら獅子岡と何人かの友達がいたらしい。そのはなしの内容が最悪だつたんだ。

「お前、平山と遊ぶのかよ」

「まーね 付き合おうつて言つたら大喜びー一応、週3で家に来てつて言つたんだけどよろこんでつて感じ?」

「うーわ。最悪じゃんーどうするの?今日やるの?」

「終わったから遊びつって言つ

「お？」

「えへへへ…ヤる。」

気持ち悪いほどあくどい笑みを浮かべて友達連中に笑う。

「じゃあさへ断られるかで賭けようぜ？1人1万円で。」

「じゃあ断るは？0人で断らないが9人へへ」

人の恋愛で賭け事をしてさ。

私はだから言つたの。

「人の恋愛なんだと思つてゐるの！賭け事とか最悪！破棄よ！最

悪！！」

「つて

「…」

笑つていてもつらいんだと思つ。

泣きそうな顔をするのを俺は見ていられなかつた。

だから。

「俺と付き合つて」

「はい？」

私はびっくりした。鈴木くんは憑ふざけはしないし。しかも、目が、真剣なんだ。

「俺、本気だから。獅子岡には悪いけど、俺はアイツのことゲスにしか思えないし。本気でスキだから。お前が思つてこるよりもスキだから。」

びっくりさせたかな？

でも本当なんだから、別にいいよね？

俺、平山が好きだから。

「……じゃあ、お願ひします。これからよろしくお願ひします」

「うん。よろしく。」

君の瞳はずいぶん恐れがあつた。

大丈夫、怖がらせたりはしない。君を愛する。ずっと、放さないから。

どんなにつらくても。優しく抱き上げられるくらいに強い男になる。獅子岡みたいなやつにはならない。約束しよう、君を捨てたりなんかはしない。

獅子岡 龍真は笑っている。平山と鈴木の2人を見て。

「どうする？」

「何が？」

「平山」

「何がしてほしいの？平山は2年になつたら戻つてきてくれるよ

ん

「キモい。やつぱりゲスじゃん。獅子岡」

「けーたん」

本田 圭太。啓太の幼なじみであり獅子岡の親友でもある少年だ。

「～」と鼻歌を歌いながら携帯の中にある一人のあどれすをはじき出す。

「実花」

「何～～ 龍真ーつ」

「頼みがある。」

「いいよーーー 何？」

「平山の心をえぐつてくれないかな？あと、お前の友達全員使わなくていいからさ鈴木 啓太もやつておいて」

「あいよー！」

そのとき、圭太は思つていた。

実花と龍真は仲がいいよな。

双子の男女のあんたたは最悪な考え方だ。

ヤつておいて。

それは。

あの2人に悲劇が落ちる。

知っているよな。

元は獅子岡のグループに入っていた2人だ。

助けられないかもしけない。

啓太。無事でいろよ。

「メアド変えました。よろしく……」

実花がそうメールを打つてきた。

Re:Re

- - - - -

おつけー

登録しどきやした!!

keita

- - - - -

「……あつ鈴木くん。実花からメール着てた……？」

儂げな少女が啓太に声をかける。純粋そうで物腰の柔らかい少女「平山」だ。

「うん。一応登録はしておいた。あの獅子岡の人だし……ね？」

「うん……あーあ。実花って1ヶ月に一回はメアド変えるんだよね……これで15回目。もーメンドクサイなあ。」

「獅子岡もえたよ。確かねww」

「え……あ、そつか、少し前にえていたよね……」

一日の半分以上を困ったような顔をしている平山は今現在も困っているような顔をしていた。

「……啓太。」

「え？」 そういう。意味が分からぬといふような顔をしている。
「名前で呼んで？ 啓太だから。けーたでもいいけど「鈴木」って
言わないよーに。」

「え？ あつ 鈴木くん？？」

「はい。減点1- WWW罰ゲームです！」

「ええ？！ け・・・

「け？」

やばい。めちゃくちゃ恥ずかしいよ。
めちゃくちゃ恥ずかしい。鈴木くんって呼んだら罰ゲームはいや
だケド、恥ずかしいし…

「け… けけけ… けーた…くん」

「はい。」

ほんのつと赤色に染まる頬はとても可愛かった。

「これからよろしくお願いします…」

可愛い。

「ん。」

「おはよう」

教室前の廊下で挨拶を優雅に交わす少女がいた。彼女の名は「獅子岡 実花」。龍真の双子の妹であり、獅子岡のグループ内で一番の権力者だった。

「実花。おはよう。」

「あつ 啓太！おはよう。」

「実花、おはよう。」

「ひーちゃん！おはようーーー！」

実花自身は柔軟な笑みを浮かべながら爽やかなあの蒼い空のよう
に美しく微笑む。

「啓太……くん。あのさあ、えつと、あの。一緒にお弁当食べよう
ね……？」

完全スルーされながらも……

「ええーーっ 啓太！一緒に食べちゃダメえ？」

……龍真の言つことは絶対。

少し寒い廊下で少し顔を赤らめる。実花の必殺技「きゅんきゅんスマイル」（名づけたのが龍真）を啓太に送つていた。当の啓太は興味がないらしい。

「うん。平山、一緒に食べよう。」

完全にスルーだ。ムシだ。フルムシだ。

— 今見てなさい… 平山 柚果^{ゆずか} 龍真に嫌われたくないの。分かつていてるでしょ？ 私は、龍真のためならば手段を選ばないのは十分承知でしょ？ 圭太がそうなったの知っているでしょ？ 親友の柚果をそうするのも分からなくはないでしょ？

嫉妬にも似た感情を出し始める実花。

— 分かつていてるよね…？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7332x/>

赤い糸

2011年11月23日20時53分発行